

## 第1回検討委員会における委員意見（主なもの）

### 1 人材育成

- スペシャリスト人材の養成が課題。海外留学への助成制度の創設や、本県出身の有名なアーティストの演奏を子ども達が鑑賞できる場づくりが必要。
- 子どもの頃の習い事の延長線上で、大人になっても芸術文化に親しむ人を増やす方策の検討が必要。

### 2 発信力の強化

- 県内すべての芸術文化情報を横断的に入手できるHPでの情報発信を取り入れるべき。ボランティアのマッチングや空きスペース情報、県内工芸品等をひょうごブランドとして紹介、SNSとリンクして活用してはどうか。
- オリンピックは東京だけではないので、関西、兵庫を中心に抜け駆けでもいいので、芸術的な企画をビジョンに盛り込んで発信し、地域を賑やかにしたい。

### 3 多様な場づくり

- 障害者の部分が欠けている。他者とのコミュニケーションの視点が必要。
- 老人ホーム等へプロの芸術家を派遣するべき。
- 但馬、丹波、淡路島でもっと本物の芸術に触れる機会を確保するため、出前を積極的にやるべき。

### 4 青少年が芸術文化に親しむ機会づくり

- 病気の子どもにも芸術文化の鑑賞機会を確保するため、NPO等の活動支援を拡充。
- 親子で参加できるコンサートや人形劇の開催など継続的な取り組みが必要。
- 子どもたちが本物に触れ、本物から学ぶ教育が必要。学校カリキュラムやクラブ活動にも踏み込んだプランを策定してもよいのではないか。
- 但馬では子どもが本物の芸術に出会う機会が少ないため、特別に何かをしてほしい。
- すべての子ども達が本物の芸術に触れ、右脳が育つ機会を兵庫県が率先して提供すべき。
- 子どもの成長のためには、芸術文化が絶対的に必要である。芸術文化を横軸において、まちづくり等どんな視点から入っても人が育つ大事な原点であるということをビジョンの冒頭に掲げてほしい。
- 子ども達やあらゆる層の人たちが美術館にやってきて本物に接することが大切。

### 5 世代間交流

- 「高齢者」と「若年者」とを区分せずに、一緒になれる場、共に支えていく場という新しい切り口が必要。
- 芸術文化団体の高齢化の問題があり、若者と交流できる仕掛け作りが必要。
- 子ども達と高齢者の交流が大切。地域の芸術家が学校に出向く仕組み作りを全県に拡

げてはどうか。

- 最近の子どもは子守歌や童謡など知らない。幼少期から日本文化にふれる場として家庭教育が大切であり、若い親の支援が必要。

## 6 施設活用

- 文化施設の老朽化と市町合併による閉鎖等の解決策が必要。
- 郡部ではホールが地域文化の中心的役割を果たしており、トップの理解のもと、地域住民や市町財政担当者にも文化の大切さを理解してもらうことが重要。

## 7 生活文化

- 文化が生活のなかに密着できているのかが課題。
- 日頃から芸術文化に触れることができるヨーロッパ並みの環境が必要。

## 8 伝統文化

- 伝統文化が学校教育の中に取り入れられたが、実際に教えられている内容は少ない。学校と地域が連携して取り組むべき。
- 伝統芸能を支える熱心な指導者が必要。全県に取組みを拡げたい。
- 文化財や伝統芸能の保存継承と、新たな発想を加えた魅力ある伝統文化作品の創造が必要。
- 伝統芸能を支える熱心な指導者が必要。全県に取組みを拡げたい。
- 伝統文化（歌舞伎、邦楽、謡曲、いけばな、お茶、短歌など）への支援が必要。
- 伝統芸能・伝統文化を芸術と切り離して考えず、人間が生活の中で培ってきたものという認識を持つべき。

## 9 まちづくり

- シューベルティアアーデ丹波や直島など、文化を通じたまちおこしの成功事例を紹介すれば地域が元気づけられ、交流人口を増やすきっかけになる。

## 10 県民みんなで支える

- 子ども達に本物の芸術を届けるための文化意識の高い寄附活動を活発化させる取組みが必要。
- ロックコープスのような若者がボランティアをすれば、コンサートのチケットが手に入るような個人メセナ活動の促進を県として検討。

### 1.1 連携体制

- 財界・企業人が芸術文化への関心を高め、交流できる取組みを。

### 1.2 その他

- ビジョンと言った以上は必ずやり遂げなければならない。みんながそういう意識をもって取り組まなければいけない。
- 子どもの教育においては、10歳が一番大切。この時期に一番クリエイティブな教師に担任をしてもらうべき。